

# 茶の湯 文化学会 会報

第106号 / 2020年9月28日  
発行 茶の湯文化学会  
京都市左京区下鴨森本町15  
生産開発科学研究所内  
〒606-0805  
TEL 075-702-9270  
FAX 075-702-9314  
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp  
http://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

## 茶会の雪駄考

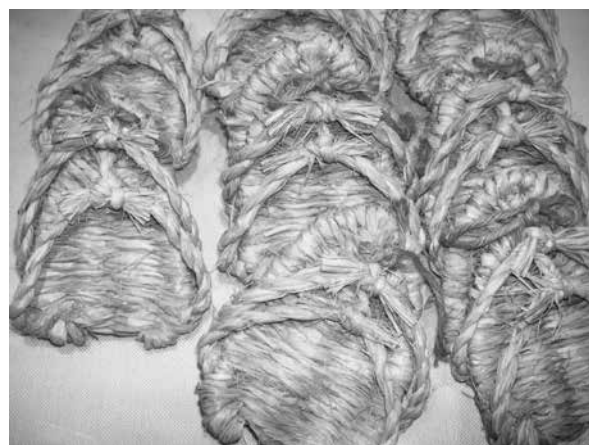
中村 幸

真のような履物が履かれていたの  
だろう。

一方、この他にも雪駄のルーツ  
がある。『十卷本和名類聚抄』(9  
34頃)や、それを底本に他本と  
校合し、和漢の古書を引用して考  
証した『箋注倭名類聚抄』(18  
83)には、唐韻からの呼称で履  
靴(たちはめ・たちばめ)という  
牛の皮を補った藁草の草履が記さ  
れている。また履靴は、後の路(露)

今年は新型コロナウイルスの流  
行で、本学会各地の例会、そして  
大会も中止を余儀なくされた。例  
年七月の京都は祇園祭の熱気につ  
つまれるが、今年はその山鉾巡行  
も中止となった。奇しくも祇園祭  
の起源は、疫病退散を祈願する祇  
園御霊会とされ、今年はその原点  
に立ちかえり、疫病封じを祈念せ  
ずにはいられない。そんな祇園祭  
の神事・行事の見物では、壮麗な  
山鉾を見上げつつも、巡行のお役  
人の袴姿や、囃子方の浴衣姿の足  
元を清々しく決める雪駄に、つい  
目を落としてしまふ。

トに広まった履物である。平安期  
の貴族や中世の武家では、草履の  
かかと部分がない、尻切(しき  
れ)や半物草(はんものぐさ)、  
関東では足半(あしなか)と呼ぶ  
草履が履かれており、  
雪駄は尻切から発展し  
たことが、『貞丈雑記』  
(1784頃)や『松  
屋叢考』(1826)  
などの記述からも知る  
ことができる。



「足半」  
(長良川うかいミュージアム展示 筆者撮影)

地草履の呼称ともされていたらしい。

その後、茶書が編まれると、茶会の客の身支度や、持物についても記されるようになる。『分類草人木』（1564）では「：草履等に至る迄、新しく垢つかぬを用ゆべし」とあり、『山上宗二記』（1588）では「：藁こんごう（わらじ）毎度新しきがよし」とする。この頃にはかかとも汚れない新品のわらじ等が、道中履きをかねてか、履き替え用かは断言しきれないが、客の用意とされている。因みに、十六世紀後半から江戸期を通して露地履きは、主客のどちらが用意するかの決まりはなく、主客の関係や、天候、露地と寄付待合の有無などで、必ずしも一定ではなかった。

また『茶道要録』（1690）には、「：虚地下駄ト云テ形アリ兼テ扉ヲ用ヘシ今ノ雪駄是也」とあり、『南方録』（1690）でも露地履に、下駄と雪駄について語

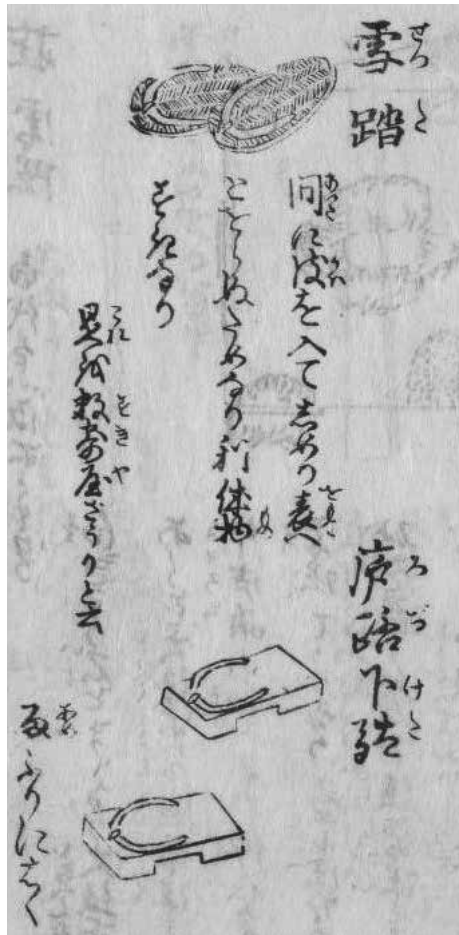
られているから、元禄期は幾つかのタイプの露地履が使用されていたことも窺える。

こうした露地履きへの履き替えは、道中の汚れを持ち込まず、防水、防音の工夫もされて、茶会に相応しかったことは言をまたないが、むしろ体を屈めて出入する門口で、連客が個を問わない露地用の仮履は（『茶湯一会集』では、亭主が下駄を用意するが、格別の敬客には下駄を替えるか鼻緒を替えて、相伴客と分ける事もある）、席入、中立、退席の度に取り違えや粗相を気にせず、スムーズに茶会が進行できる、これぞ恰好のアイテムではなかったか。

ところで雪駄の呼称は、播磨地方の方言のセチベンスなわち、けちに端を発し、けちく

さい人が竹皮草履を用いたことから「セチダ」と呼んだのが訛って、関西では「セキダ」、関東では「セツタ」と呼ばれたという。ただこの他にも、セキは草履の意、ダは足駄のダか。シリキリダ（尻切駄）の略転か。セキ（席）は敷物、筵の意、ダ（駄）は載せる意でそのつくりから、などの諸説もあるらしい。『日葡辞書』（1603-4）には「Xejida（セキダ）竹の皮で作った履物」とある。

『毛吹草』（1638）には、撰津国の産物と記されている。そしてその始まりが、千利休（1522-91）と触れる書物は多く、『長闇堂記』（1640）、『堺鑑』（1684）、『南方録』（1690）、『本朝世事談綺』（1734）、『茶道早合点』（1771）、『貞丈雑記』、『茶道筌蹄』（1847）、『守貞謾稿』（1867頃）など江戸期の文献を列挙できるが、その真相は定かではない。



『茶道早合点』  
(国立国会図書館デジタルコレクション)

休時代、へちくわんと云佗、皮そ  
うり二牛皮ニテ裏付、路治へはき  
たるなり、其時分ハへちくわんと  
申なり、今ハせきだと云」とあ  
る。これによれば十七世紀後半で  
は、露地履きとしての雪駄はあま  
り見られないのであろうか。そし  
てすでに、雪駄が利休発案とする  
書物が流布した状況で、表千家五  
世の随流齋が「せきた」の発案は  
利休ではなく、京のわび茶人のノ  
貫と書き置くには、それなりの意  
味があったのだらう。このノ貫の  
発案の真相も不明だが、セチベン  
の語から質素儉約的な、わびしい  
イメージによるものであろうか。

それを窺わせるものとして、京  
都の俳人、安原貞室者の『かた言』  
(1650)では、雪駄は京の者  
が作り、利休という茶湯者が世に  
広めたと、『堺鑑』『南方録』の流  
布以前に記しており、これはあな  
がち見当違いではないのかもしれない。  
さらに『和漢三才図会』(1  
712)の「屨釘」の項目では、  
婦人用の履物の解説に尻切の呼称  
も記されて、それに続く「雪踏」  
の解説に、千利休が始めて之を用  
いたとある。これらを鑑みると、  
利休が雪駄を発案したというより  
も、利休が愛用し始めたというの  
がよさそうだ。するともしや利休  
は、表舞台で天下人と通じる反面、  
前近世の竹材と皮革の新たな流通  
形態への援護として、雪駄の宣伝  
塔も厭わなかった？かとも想像し  
たくなる。

それはさておき、その後、雪駄  
は元禄期(1688-1704)以  
降に、かかと部分に破損を防ぐ  
「ちゃらかね」と呼ばれた尻鉄(し

りかね)を打つのが流行り、その  
伊達な足音から江戸の侠客が履い  
たとか、八丁堀の与力同心も愛用  
したと今に伝わる。やがて様々な  
バリエーションが生まれ、宝永期  
(1704-1711)に僧侶が履  
いていた「カピタン雪駄」は、白  
革の鼻緒と三枚重ねの裏皮という  
洒脱さで、後に武士や医者の中で  
も流行する。革の鼻緒の雪駄は、  
粋な着流しから仙台平の袴でも、  
鮫小紋の袴でもピタリと決まる格  
を備え、都市民の洗練された履物  
として定着していった。

これまでも茶の湯が、衣食住と  
いった日本の生活文化に及ぼした  
影響は大きいといわれ、しばしば  
食文化や、住空間での事例を耳に  
する。そんな中で雪駄は、服飾史  
における展開をいきいきと今に伝  
えてくれるのであった。

ところで、セチダに「雪駄」「雪  
踏」の字をあてるとは、なんとも  
風流である。『堺鑑』には「雪踏  
の始は、昔日尻切と云物を用、千

利休作意として、雪の比、茶湯の  
時、露地入の為に、草履の裡に牛  
革を附させ用る也。即ち、雪を踏  
と云義を取て名附たりと云伝也」  
と記されて以後、『本朝世事談繪』  
『守貞謾稿』にも似通った意味合  
いのくだりがある。「雪」のあて  
字は、防湿効果と好笑的効用のア  
ピールにびったりで、その絶妙な  
作意に感じ入る。また故に『茶道  
要録』で「下駄足駄雪駄皆俗語ノ  
俗字也」とあるのも一理あろう。  
それにしても雪駄の露地への第  
一步は、新雪に踏み入るように、  
さぞ清新だったことだろうか。そ  
んな思いにふけながら、十月の時  
代祭で多様な履物の見物も叶わぬ  
今は、からりとアスファルトで鳴  
る巡行の足音を、強く待ち望んで  
いる。

## 例会

### 東京例会

(令和二年二月二十九日)

### 「仏教儀礼と茶」

#### ―茶の湯前史―

### 米沢玲

平安時代初期、仏教を学ぶために大陸へと渡った遣唐使によって茶は日本へと伝えられた。当時の茶はきわめて貴重であり、単なる嗜好品ではなく仏教のさまざまな儀礼を行う際に欠かせない供物として、僧侶が持ち帰ったと考えられる。本発表では、平安時代の初期から鎌倉時代にかけて、茶が飲料として広く定着する以前に仏教儀礼において重用されていたことを史料や絵画作品を取り上げながら論じた。茶を用いた代表的な儀礼としてあげられるのが、天台大師供などの祖師供養や季御読経、北斗法、羅漢供などである。天台大師供は延暦十七年(七九八)に

最澄が比叡山で行った際、智顛の

画像に茶を供えた記録があり儀礼に茶を用いた最古の例である。季御読経は僧侶たちが転読を行う大規模な宮廷儀式で、読経を終えた後には茶がふるまわれていた。茶を神仏に供える、あるいは儀礼においてふるまうのは特別な薬効が期待されていたと考えられ、北斗法では茶が仙薬、すなわち道教思想に基づく不老不死の薬であるとされていた。また、とりわけ茶は羅漢との結びつきが強く、多くの羅漢図には喫茶の様子が描きこまれている。これは、天台山における羅漢への茶供という思想や、羅漢が修行僧になぞらえられていたことにも起因している。南宋時代の大徳寺伝来五百羅漢図には中国・宋代の僧院生活を題材とした図像があり、その中には当時の喫茶文化もまた反映されている。

### 金沢例会

(令和二年七月五日)

### 「山上宗二記」の諸本

#### 竹内順一

伝授日別には、「天正十六年正月二十一日付」が八種、「同二月二十七日付」が二種、同五月吉日付、天正十七年二月吉日付、天正十八年三月吉日付が各々一種ずつあり、計十三種がある。

宛先別にみれば、①天正十六年正月二十一日付の宗二の子息・伊勢屋道七宛本(写本は國學院大本など八点)、②同正月二十一日付の高野山・安養院宛本(齋田記念館本)、③高野山・医乘院宛本(推定写本は文禄五年九月付の東京芸大本か)、④同正月二十一日付の愛宕山・福寿院宛本(彦根城博本など)、⑤同二月二十七日付の桑山修理重晴宛本(群書類従本Ⅱ茶器名物集がかねてから知られる)、

⑥同二月二十七日付の出雲・岩屋寺宛本(不審菴本)、⑦同五月吉日付の北条家・林阿弥宛本(今日

庵文庫本)、⑧天正十七年二月吉日付の北条家・板部岡江雪齋宛本。

写本四点が知られ、なかでも淡交社・茶道古典全集本として知られる。ただし、厳密に言えば写本原本は世に存在せず、追跡すれば校注者・桑田忠親の校注本として存在した。また、南家本(一九三〇年『堺市史 第四卷』所収本だが、原本は焼失。創元社『茶道全集 卷の五』一九三六年に再録)、酒井家本(堺市の酒井氏が古書店で発見し、堺市博物館に寄贈)。⑨天正十八年三月吉日付の下野金剛寺・皆川山城守応照宛本(尊経閣本など一〇点)。

この他、出雲の岩屋寺宛本の奥書によれば、宗二が天正十六年二月に牢人する以前に大名宛への伝授本が三種、また、出雲の茶人・三沢宗程宛も想定される。

『山上宗二記』の名称は、後世の写本の題簽や内題が定着したもので、本来は無題。瓢庵宗二伝書、瓢庵宗二古書、宗二之記など約五

十数種がある。『古写本茶乃湯珍書（天正十八年三月吉日付 皆川山城守宛）東大総合図書館 書架番号YB20-49』は、名称こそ『山上宗二記』を連想させないが、写本として良本である。

内容別・構成別分類では、二種類。いきなり、「茶入（茄子）」の項目から書き出す簡略版でI型本と呼ぶ。一方、麗々しく、茶の湯発展史を概観し、大壺から書き出す詳細版II型本がある。

## 例会のご案内

### 例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。

### 東京例会

二〇二〇年十月二十四日（土）  
午後二時～

会場：東京国立博物館平成館小講堂  
「女性が茶道を学ぶ意味―一九八〇年代以降の雑誌研究を中心に―」  
太田ありか

「竹川竹齋『川船の記』（射和文庫蔵）―空想茶会記を含む桜田事変関連資料が隠されていた茶書（全八冊）について―」  
岩田澄子

二〇二〇年十二月十二日（土）  
午後二時～

会場：東京国立博物館黒田記念館小講堂

「福喜多靖之助著『CHAN-O-YU TEA CULT OF JAPAN』―海外へ伝えられた近代数寄者の茶の湯―」  
櫻庭美咲

「古田織部と連歌―近衛信尹との両吟百韻を中心に―（仮）」  
工藤隆彰

午後二時～  
会場：未定

「宗湛日記の茶会における「盆」の使用（仮）」  
作山裕美香

「『南方録』における茶の湯の系譜―「達磨」と「趙州」を手がかりに―」  
櫻本香織

### 東海例会

二〇二〇年十一月一日（日）  
午後二時～三時半  
（開場午後一時半～）

会場：昭和美術館会議室

「尾張の焼物（part.ii）（仮）」  
前田 博

### 北陸例会

二〇二二年三月二十日（土）  
「未定」

### 金沢例会

日時未定  
移動例会

高山茶の湯の森見学・料亭「洲さき」

日時未定

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

### 高知例会

二〇二二年二月七日（日）  
午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

茶書『未定』を読む  
茶席 正午～午後四時

茶の湯文化学会の研究成果を実践する。茶の湯を一般の方々に親しんでもらうため「床飾り」「道具立て」はするが、お点前はお客次第として楽しめる茶席を設ける。

会費 三百円

## 新刊案内

『お茶作り名人紀行』中村羊一郎  
著 羽衣出版 定価二、〇〇〇円  
＋税

静岡県の情報誌『茶の文化』に連載されたものを一冊にまとめて刊行。全国の茶産地を訪ね、煎茶、抹茶、玉露、釜炒り茶、番茶などの「お茶作り名人」のさまざまな体験を記した書。

『世界で一番やさしい茶室設計  
最新版』株式会社エクスマレッジ  
編集部

一一五のキーワードで学び、茶室設計にまつわる様々な知識をやさしく語る書。

## 質問コーナー

質問

炭手前を客前で行うようになったのは、いつ頃からのことでしょうか？

(宮崎真紀子)

永祿九年(一五六六)の写本『古伝書』では、「亭主は料理を出し酒湯斗も済ませたら、露地で手水を使い炭斗を持って席に入る。亭主が釜を下ろすのを見て、客は席を出る」とあります。巻頭に「当世はやりの茶湯に比べ故実」とあり、原本はさらに二、三十年前に成立したと考えられます。しかし十六世紀前半には、客前での炭手前はまだ一般的ではなかったといえるでしょう。元龜三年(一五七二)の『烏鼠集』では、「亭主が巧者だったら客は炭手前を見るが、初心者ならば席を立つ」とあり、亭主の炭斗の持ち出しに始まり、火のお

こし、羽の扱いなど、炭手前の所作全般に、客が関心を持つようになったことがわかります。

天正十四、五年頃になると、いくつかの文献に炭道具や炭手前の記述がみられます。『今井宗久茶湯日記抜書』天正十五年(一五八七)六月十三日「上様御成」の宗易(利休)會では「長板二、銅フロ、但、炭ハカリ火ハなし、半田土鍋ニテ火ヲ入レ、雲竜釜ヌラシテカクル」とあり、この利休の炭手前は現代とは異なるものの、上様(秀吉)を前にした所作でした。慶長二年(一五九七)一月二十四日夜、秀吉は神屋宗湛ら博多の商人三人を、二条城内数寄屋に招きます。「入リヤ」と声をかけた秀吉は水屋から炭斗を持ち出し、まず炭手前をします。そして炭の拝見の時に、秀吉は自ら「巧者」と言ったと『宗湛日記』は記しています。

一 炉(風炉)内の炭を熾むすという  
ことは、元来は水屋の仕事でした。

これを茶席で客が拝見するようになったのは、十五〇年代半ば近くなつてからと考えられます。(谷村玲子)

●年会費未納の方は、至急払込み下さいませよう、よろしくお願ひいたします。

